慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	橋本弘毅訳 経済地理学の方法論
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.3 (1935. 3) ,p.459(141)- 461(143)
JaLC DOI	10.14991/001.19350301-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350301-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

橋本弘毅譯「經濟地理學の方法論」

小島榮次

ソヴェト・ロシアの科學は、今やマルクス主義的方法論の新しい基礎の上に、そのすべてが再建されつゝあるやうに見える。こゝに紹介するレニングラード大學經濟地理學研究所編橋本弘毅譯「經濟地理學の方法論」も、斯かる意義を持つた勞作の一つで、後述の如く現在のロシアにとつて極めて實踐的重要性を有する研究であるが、吾々にとつても、比較的に新しく科學としての成立を認められた經濟地理學の研究上、最も重要な資料の一つと云はねばならぬ。

本書は四篇の論文からなつて居る。即ちエム・ボグダンチコフ「現段階における經濟地理學の諸任務」ヴェ・ヴォルベ「地理學における觀念論及び機械論的理論に對して」ア・ア・グリゴリエフ「地文學の對象と諸任務」ベ・ベ・ボルイノフ「現代の土壤地理學における諸任務」である。ボグダンチコフに從へば、ロシアの經濟地理學は、「ソヴェト聯邦の研究に際しては、社會主義建設の具體的諸任務を究明し、資本主義世界の研究に際しては、(中略)資本主義の到達すべき必然の運命を意識し得させる。」(三頁) その上に又、今や第二次五ケ年計畫の進行と共に、生産力を社會主義的に配備するといふ問題を理論的に研究すべき重任が、經濟地理學に課せられる。然るに極めて最近まで(凡そ一九三一年頃まで)「經濟地理學においては、ブルジョア的・富農的・妨害的・反革命的理論が支配的であ

つた。」（五頁）斯くして獨逸のアルフレッド・ヘットナァ及びそのロシアに於ける追隨者と、レニングラードのデン教授及びその一派の人々との觀念論的立場・それに基く科學の分類・經濟地理學を記述的科學とする點等を非難すると共に、これ等の人々がブルジョア的・妨害的である所以を示して居る。例へば、經濟的地區の間には地理的分業が行はれ、工業國として或は原料國として相互に調和的結合をなして居るだけで、植民地の壓迫とか資本主義の不均等的發展の法則とかは存在しないと說くが如きは、斯學の階級的性質を無視するものとされる。又例へば、マルクスに從へば、經濟的地區の形成に於いて、生產力の合理的配備に於いて、自然的諸條件が決定的役割を演ずるわけではなく、社會的構成が決定的要因となる。然るにこれ等の人々に於いてはこれと全く異り、經濟に對する自然的諸條件の直接的制約性が論定される。（二五頁）從つて、シベリアで穀物の生產を奬勵することは無意義であるとか、中央アジアに工業的配備を行ふことは無意義であるとかの結論が生じ、妨害者と呼ばれることになる。次にヴォルベは、これも主としてヘットナァ主義を攻擊の對象とし、その地理學はカント主義に基礎を置くが故に從つて不可知論的であり信仰主義であることを指摘する。從つて又、その科學の分類法――科學を體系的・時間的・空間的の三種に大別し地理學を以つて空間的科學となす分類法は、唯物論の立場から否定される。更に又、地理學を以つて個性記述的科學となすことも、「具體的現實からその最も重要なもの――諸現象相互間の內的關聯――を拔き去るもの」であるが故に誤謬であり、「諸事象はそれらの相互的關聯において、それらの辨證法的統一において考察されねばならぬ」（七五頁）と指適する。次のグリゴリエフも、やはりヘットナァの地理學に對して、前揭二論文と同じ非難を行ふが、それと同時に更に進んで、唯物辨證法に基いての地文學に對する自己の見解を詳細に展開して居る。最後にボルイノフは、土壤地理學が、單に農業・林業に止まらずその他萬般の方面に於いて、計畫經濟の遂行に對し重要な貢獻をなすことを以つて、その任務となすことを論じ、土壤地理學的知識の欠除から生じた種々の故障につき幾多の實例を擧げることに依り、如何にその任務の重要であるかを示して居る。

結局本書に收載されて居る四論文のうち、二篇は自然科學に屬するものであり、一篇は地理學一般の哲學的基礎を論ずるものであるから、經濟地理學の方法論に直接關係するものはボグダンチコフの論文のみである。然しこの一篇は、まだ方法論的研究の十分でない斯學界に對して、極めて重要な貢獻をなすものであり、この譯書の表題「經濟地理學の方法論」も敢へてふさわしからざる表題ではない。「經濟地理學の研究對象とは、生產力――これを生產關係との辨證法的統一において把握せねばならぬ――の配備における、總體としての社會的生產の配備に於ける、諸法則性の研究と定立とである」（一三頁）といふ言葉や、「經濟地理學において人間と自然との相互關係を分析するに當つては、自然的環境が人間に及ぼす影響といふ立場に立つてゞなく、相異れる社會的發展段階における人間の自然的事情に對する關係といふ觀點からこれをなすのが唯一の正しい方法である」（一二頁）といふ言葉は、吾々に無限の示唆を與へるものである。尙最後に、コムアカデミー經濟學研究所經濟地理學部編經濟地理研究會譯「世界經濟地理」は、ボグダンチコフ、ヴォルベをも含む多數の學者の共同勞作であり、右の如き方法論に基いた經濟地理として注意さるべきであり、又コムアカデミー教育學研究所經濟地理學部編經濟地理研究會譯「ソヴェート・ロシヤ經濟地理」も執筆者こそ異るが、同樣な立場に據つてロシアの激變した狀態を描寫するものとして、貴重な資料であることを附言して置く。（「經濟地理學の方法論」昭和九年十月發行、菊判一七二頁、一圓五〇錢、「世界經濟地理」同年四月、菊判三〇〇頁、二圓、「ソヴェート・ロシヤの經濟地理」同年九月、菊判三九五頁、二圓六〇錢、三冊共叢文閣發行、昭和十年一月二十四日記）